

これからの指導に必要なのは担任や学年団の「企画力」

生徒の成長を見取って指導を 見直す発想力と柔軟性が必要

愛知県立豊田高校校長 青山伸一

生徒の学ぶ意欲や忍耐力の低下が指摘される今、学校に求められる指導とは何か。従来行われてきた指導の価値を高めるために持つべき視点や、新しく行う必要がある取り組みについて愛知県立豊田高校の青山伸一校長に話をうかがった。

話を受け止める姿勢や 耐える力が希薄な世代

今の生徒を見ていて感じる課題の一つは、全体に向けた話を自分のこととして受け止められない生徒が増えていることです。話す側は一人ひとりの生徒にどこか思い当たることがあるように話をしていても、そう思わない生徒が多いように感じます。また、以前よりも、学習に「効率性」を求める生徒が多く見られると思います。大学入試においても、楽をして点が取れるテクニックがどこかにあるのではないかと思ってい

る。担当科目の化学についていえば、論理的に考えて答えを導くというよりは、単に暗記をする科目と

思っている生徒が多いと感じます。こうした生徒の変化の要因はいろいろと考えられますが、一つには少子化や核家族化により、家族の中で子どもが中心となり、自分に話し掛けてもらえることが当たり前になっている状況があると思います。また、今の高校生の保護者は、その大半がバブル時代に青年期を送った人たちです。物質的な豊かさに恵まれる一方で、志を抱いて地道に努力すること、目的に向かって根気強く頑

張ることに価値観を持ちにくい環境にあった人もいるかもしれません。保護者のそのような意識が、知らず知らずのうちに子どもに伝わっていることも考えられます。

生涯学び続ける姿勢を 育むことが教師の使命

学校の置かれている状況によって育てたい生徒像は異なると思います。が、現任校では地域社会で活躍できる人材育成が求められていると感じます。地域社会で活躍できる人材とは、自分のことだけを考えるのでは



あおやま・しんいち◎教職歴32年。愛知県立岡崎高校で20年教壇に立ち、主に担任や学年主任を務める。愛知県教育サービスセンター（現・教育スポーツ振興財団）を経て、再び岡崎高校に教頭として7年間勤務。現任校の豊田高校は2年目。担当科目は化学。愛知県立豊田高校◎全目制／普通科／共学／1学年約320人／10年度入試の合格実績（現浪計…国公立大は、名古屋大、名古屋工業大、愛知県立大、愛知県立芸術大、富山大、金沢大などに34人が合格。私立大は、愛知大、愛知医科大学、愛知学院大、南山大、名城大などに延べ440人が合格。

なく、人とのつながりを大切にして地域に戻って来るような人材です。このような人材を育てるには、学校教育以外にも、外部の力を借りることも必要になると思います。

また、知識基盤社会を生きていくには、地道に努力をしながら生涯学び続けられる姿勢を身に付けさせることも重要です。大切なのは、「大学に入ること」ではなく、「大学で、そして大学卒業後も伸び続けることが出来るかどうか」という点です。学力を付けさせることはもちろんですが、高校・大学を卒業して社会に出た後に立ち返ることが出来る学習方法や学習姿勢を、高校時代に意識的に身に付けさせることが、我々教師の使命だと思っております。

高校、大学、社会それぞれの学びの連続性を授業で見せる

私は、教育には二つの側面があると考えています。一つは社会に有為な人材を育てるとして側面、もう一つは、個人の能力を引き出し、個人

の幸せを追求する力を付けるという側面です。最近では、後者ばかりが強調されているような気がします。今後は、両者のバランスをより意識して教育を行うことが求められるのではないのでしょうか。そのためには、

進路指導や生徒指導など学校でのあらゆる活動が大切になります。中でも、「授業」が根幹であることはいうまでもありません。

私が授業を行う中で課題としていたことは、高校で学ぶ内容と大学で学ぶ内容をいかに接続させるかという点でした。特に理数系分野は、高校の学習内容と大学の研究内容とで大きな差があります。大学入学後に生徒が感じるギャップを最小限に抑えられるような工夫が必要だと考えました。そこで、私は大学で扱うような教材を研究し、その内容を再構築して授業で取り上げるようにしたのです。このような授業を行うことは、つま先立ちくらいの背伸びをして生徒を指導しているような感覚があり、頭を悩ませていました。しかし、「今の学び」と「大学での学び」

との結び付きを見せることによつて、高校での学習は基礎に当たるのだと大学進学後に実感してくれる生徒が増えたと思います。

最近の例で言えば、2010年に鈴木章・北海道大名誉教授、根岸英一・米パデュー大特別教授という日本人研究者二人のノーベル化学賞受賞がよい題材かと考えます。タイミングを見計らって、二人の研究テーマである「クロスカップリング反応」のメカニズムを、高校で学ぶ有機化学の反応と関係付けて、授業で説明するような先生がいてほしいと思います。あるいは、根岸教授がプロジェクトチームを立ち上げて取り組む「人工光合成」の研究に関連して、生物の教師が光合成について話したり、化学の教師が光合成の反応の本質である電子リレーについて酸化や還元と関連させて解説するのもよいと思います。

他の教科でも、大学で学ぶ内容や最先端の研究、社会で話題になっていくことを、授業の内容と結び付けることは出来ると思います。授業の

内容にかかわる最新のトピック、効果的な指導法について、教師は今後一層の研究を重ねることが求められているのではないかと思います。

「日々の学習が大学や社会とつながっている実感」「興味・関心を発展させる楽しさ」。そうした基盤さえ高校時代に身に付けておけば、大学入学後、また社会に出た後も、自律的に学び続けることが出来るはずです。

中学時代の生徒の実態を知る事が一層大切に

団塊世代の大量退職に伴い、教員の新卒採用が増えている地域もあり、指導力向上は引き続き重要な課題です。

指導力向上の鍵となるのは、徹底的に生徒とかわる姿勢ではないかと思えます。当たり前のことですが、学習歴、学力、進路希望、家庭の経済状況、保護者の思いなど、生徒はそれぞれ異なる背景を持っているからです。特に、新入生について

は、まず一人ひとりの生徒を知ることが重要になります。生徒把握の方法として、面談はより重要になると思います。内容や方法も今までのやり方から一歩踏み込むことが求められるのではないのでしょうか。例えば、家庭訪問をして、生徒の育った環境を知る。「こんな山を越えて通学しているのか」ということを知るだけでも、生徒に掛ける言葉は変わってきます。本校でも、必要な生徒に対して、出来る限り家庭訪問を行い、生徒把握に努めています。

面談などの改まった場だけではなく、先生方が日常的に行っているように、生徒が職員室に来た時や廊下ですれ違った時に一声掛けたり、一緒に掃除をしながら話したりする中で、授業や面談では見えてこない生徒の一面が見えてくることもありま

す。また、生徒の顔つきを見て、普段と様子が違えば声を掛けて話を聞いたり、学級担任や教科担任と連携を深め、善後策を相談したりすることも出来ます。いずれにせよ、普段から生徒をしつかり見ていなければ、こうした指導は出来ません。

中学校の規模や、その中の生徒

の位置を知ること、生徒を理解する上で有効になると思います。1学年100人足らずの中学校で上位だった生徒もいれば、300人を超える集団の中で頑張ってきた生徒もいます。こうしたことを生徒から意識的に聞き出していく中で、生徒の学習意欲をかき立てる声掛けのヒントが出てくるのだと思います。

学力向上に近道がないのと同じように、教師の指導力向上にも特効薬はありません。生徒と徹底的にかかわり、生徒把握に努める中で、課題は何か、それを解決するために何が必要なのかということが見えてくるはずで

最前線にいる担任の「企画力」が指導の鍵

授業や学校で指導できることもそうですが、社会人講話など、今後は外部の力を借りることも重要になると思います。その際は、生徒にどのような観点で考えさせたいか、指導上の目標をしつかり伝え、生徒の成長を見取り、機を捉えた効果的な進路学習を企画することが大切です。

例えば、1年生対象の講演なら、講師と打ち合わせをして、社会に出ることへの憧れや夢が膨らむようなことを話してもらったり、社会では身だしなみや第一印象で判断されることもあると伝えてもらったりすることもよいと思います。

こうした生徒の成長に応じた指導を行うためには、最前線で指導に当たる担任の「企画力」が鍵を握ります。生徒は一人ひとり気質も学力も、成長の度合いも違います。目の前の生徒に今必要なものは何か。その答えは、前年踏襲の指導からは生まれません。従来の取り組みを見直していく発想力と柔軟性、あるいは新しい企画をつくり出すことが大切なのです。

教師の主体性を尊重した学校運営で活性化を図る

学校を元気にするためには、先生方の企画力もさることながら、それを引き出す管理職のマネジメント力も重要です。ただし、すべてを管理職のトップダウンで行うことに、私は反対です。私は教職に就く前、製

薬会社で研究職に従事していました。民間企業も学校も同じだと感じるのは、現場から上がってくる発想を大切にしなければ組織は活性化しないということです。先ほどお伝えしたとおり、生徒に今、何が必要なのかを最も理解しているのは、担任の先生方です。その先生方が自身の目で見極め、他の教師と共通理解を図りながら、学年あるいは学校全体として取り組みを構築していくことが大切だと思います。

管理職の役割は、そうした先生方の主体性を尊重しながら、方向性をマネジメントしていくことです。今の生徒にどのような指導をしていくことが最善なのかは、先生たちの感性を大切にしなければ見えてきません。若手教師から「こういうことをしてみたい」という提案があれば、「是非取り組んでみてください」と背中を押す。教師から何もアイデアが出てこなければ、管理職自身が率先垂範で現場に企画をぶつけていく。先生方が思う存分力を発揮できる環境をつくることで学校全体が活性化し、ひいては生徒の意欲も高まると思うのです。